

創刊に際して

日本ディサースリア臨床研究会 会長・編集委員長
西尾正輝

ディサースリアの歴史は「診断の時代」、「治療の時代」、「臨床方針決定の時代」の3期に区分されます。第一期である「診断の時代」は、1969年に発表された古典的なDarleyらによるメイヨー・クリニックの報告をもって完結し、1970年代に全盛期を迎えました。この時代の情報は国内にもすみやかに伝えられ、発展しました。この点で、廣瀬肇氏、福迫陽子氏、柴田貞男氏らが残した功績を忘れてはならないでしょう。とりわけ、本号の祝辞にてMiller教授が指摘しているように、廣瀬肇氏らによるX線マイクロビーム方式を用いた研究は国際的に高い評価を得ました。日本にはこうした誇るべき歴史があります。

第2期である1980年代の「治療の時代」に入ると米国ではディサースリアの評価ならびに言語治療技術が進展し、一連の手法が開発されました。こうした時代を経て、エビデンスに基づいて臨床方針を決定する今日の「臨床方針決定の時代」に入っています。

ところが、国内におけるディサースリアの領域では、Darleyらが築いた「診断の時代」でその歩みが滞ってしまい、いわゆる「空白の25年間」が生じてしまいました。このため、国内の言語聴覚士の多くは、1980年以降に米国を中心として進展し体系化された言語治療技術について教育を受けることもないまま、きわめて古典的なアプローチを臨床で施行してきたというのが実態ではないでしょうか。

こうした閉塞的な国内におけるディサースリアの臨床状況を打破すべく、日本ディサースリア臨床研究会が設立されたのは2002年のことでした。以来、本研究会が主催したさまざまなイベントを通して、欧米で蓄積された豊富な知見と技術が積極的に国内に導入されるようになりました。ペーシングボード、リズムック・キューイング法、リー・シルバーマンの音声治療(LSVT)など多様なディサースリアの言語治療手技が国内に普及し、今日ではこれらは言語聴覚士国家試験でもしばしば出題されるまでになりました。発足当時、こうした言語治療手技の名を知っている言語聴覚士は、ほとんどいない時代でした。

このようにふり返りますと、本研究会が過去約10年間に果たした役割は大きかったといえましょう。確実にこの国のディサースリアの言語治療スタイルを進展させ、改変させたと思います。しかし、本号の祝辞にてYorkston博士が指摘しているように、臨床的知見は文章化して記録に残す必要があります。こうした点で、本誌はディサースリアの専門誌として国内の学術領域において重要な役割を果たします。厳格な査読により審査され受理された重要な情報を世に送り、蓄積し続けなくてはなりません。ディサースリアに関するエビデンスは、国内では深刻に不足しているのです。

私たちはこれまで全力で走り続け、今、歴史の新しい扉を開いたところです。会誌を創刊するとともに、今年度より日本ディサースリア学術集会を開催いたします。まだまだこれから長い歴史を刻み続けなくてはなりません。私たちにできることには限界もあるでしょう。しかし、私たちにしかできないことも多々あると思います。そのためには、多くの会員の皆様方のご協力が必要です。会員諸氏の研究成果を本会誌に積極的にご投稿していただきたいと願っています。皆の智の力を結集し、すばらしい雑誌に育てましょう。また、内外における多くの関連団体と協調的な連携を図り、この領域の発展に貢献できるように皆で努力して参りましょう。

最後に、本誌の創刊にあたり御祝辞をお贈り下さりましたYorkston博士、Miller教授に心より御礼申し上げます。また、創刊号に際して貴重な原稿をお寄せ下さりました城本修氏、倉智雅子氏、小澤由嗣氏に深謝いたします。また、本誌の創刊にご支援賜りました方々に心より御礼申し上げます。